
僕の家族を紹介します。

うんばば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の家族を紹介します。

【Nコード】

N0600E

【作者名】

うんばば

【あらすじ】

元レディース特攻隊長だった母。清く正しく生き、弱気だが優しい父。母の血筋を色濃く受け継いだ姉。厄介事から全力で逃走する犬のタロー。そして僕。これは僕、長男の視点で語られる我が家の日常。日々が戦争な松永家。圧倒的な独裁政治状態。今日も僕は母と姉の繰り出す脅威に頭を下げる。平和ってなんですか神様w初めての投稿ですが笑って読んで頂けると幸いです。コメント頂けるとうれしいですwww

第1次戦争

朝日がカーテンの隙間から顔を覗かせている。

彼らが照らすのは美しく微笑む妻でも彼女でも綺麗に片付かれた部屋でもありません。

二日酔いで顔が膨れ上がった僕の御顔です。

どうも。長男です。

同じ体制で何時間も固まっていた為か全身が軽く痛みます。

お気に入りの煙草。マイルドセブンを口にくわえ火をつける。

口からは十二年見続けた紫煙が部屋の天井へと向かって昇っていった。

同時にため息とうめき声も漏れ出る。

すでに中年の親父と化していると思うのは僕だけでしょうか。

そんなこんなでおながが減っている事に気づいたのでご飯探索隊に変身。

シャバダーン。

ゆっくりと自分の部屋のドアを開けリビングへと向かいますが。

目に付いたのはひとつの鍋と書置きのメモ。

鍋の中身はすでに水分をたんまりと奪われた味噌汁。

「世界には不幸な人がいっぱいいますよね。 母より。」

僕もその中にはカウントされているのでしょうか母よ。

ていうか計画犯だろうアンタ。

メモを丸めてゴミ箱へ。

最近母がマシな朝食を作った事が無い。

父に至っては毎日ケロッグコーンだ。牛乳の減りが早いのは父の孤独の証。

以前、母に父がかわいそうではないかと意義を申してたことがあります。

それに対する母の答えは至極簡単なものでした。

「じゃあ母乳だったらよかったのかい。でるかしら母さん。」

茶を噴出した乳、いや父。

全力でその茶から逃走する犬タロー。

お気に入りの服に茶がかかった姉。暴走モード突入。

アンビリカルケーブルが切断された姉は誰にも止められない。

あら。

何故僕を蹴るのですか姉よ。

あつ、そこは駄目。駄目でございます姉上。

まだロクに役目も果たして折らぬ若造が多数ございます！

駄目でございます！姉上ー！

蹴り上げられた惨めな僕の息子を庇い中腰の姿勢で悶絶する僕に父が躓く。

茶を十分にふき取った布巾は母の御顔へ見事に飛び立った。

そしてその日も松永家の戦争が始まるのでした。

今日はすでに昼過ぎ。

平和な一日が僕を待ち構えています。

久しぶりに買い物でも行こうかと心が躍っています。 シャバダーン
w 失礼。

まず顔を洗いに洗面所へ向かうのですが途中で異物を発見。
廊下で寝ている姉でした。

普段着はおしゃれなものでも様々な服をお持ちな姉ですが。

いくらおしゃれでも廊下でよだれたらして寝るのはどうかと。 どう
かと思えますぞ。

起こさぬ様に横をすり抜ける僕ですが足首が固定されているかのよ
うに動きません。

おかしいな。

力一杯足を持ち上げるのですが重くて上がりません。

そして後ろからは呻き声が聞こえてきます。

振り向いてはいけない。 駄目だ。 駄目だ。 駄目だ。

足首に巻きついていて「何か」は絞める力を強めてきます。

悲鳴を上げる足首に僕の心。

そして聞きたくない声が僕の耳に。

「ふふ……ふふふへへふふ」

ああ、さようなら平和な日常。さようならお買い物。
そして平穏な日々を願ったわが心よ。

振り向くと顔の半分を髪の毛で隠した姉が足に巻きついていました。
うわ言の様におなかが減ったを繰り返しながら力を強めてきます。

観念した僕はそのまま姉をリビングまで引つ張り母の残した鍋を姉
の目の前に置きました。絶望の表情の姉。どうでもいいがよだれを
拭け。頼むから。

ていうか今鍋の中に入らなかったか？

味噌汁が完全に食物の欄から離れ、今後の僕の予定が決定された瞬
間でした。

b a b y b o y

私はここにいますよ。どこもいかにまってるーよ。

晩御飯を作る僕の後ろで姉がずっと口ずさみます。

何か新しい呪いの様に聞こえるのは僕だけでしょうか？

どうか明日は僕の時間がありますように。

胸の奥に強く願って僕は今もカレーのお守りをしています。

生まれた星の下で父は何を願う。

きらめく星の下。空を見上げて紫煙を上げる21歳。どうも長男です。

携帯を開いて時間を確認するとすでに夜中の1時。体をさする様に、冷えた風が吹きすさぶ。

隣には凍えて死にそうな顔をした父。

ああ、眠るんじゃない。死ぬぞ父さん。

体をゆすつて父の意識を取り戻させる。

父は重いまぶたを必死でこする。

もう。たくさんだ！畜生！全部あいつのせいだ！
 言ってやる！言ってやるさ！俺のすべてをかけて！！！！

僕は自分の家を見上げて言葉を放った。

強く、切なく、消えそうな声だけどあの人に届くように。聞こえる様に。

「ごめえええんああさあああああー
いいいいいいいい！！！！！！」

事の発端は二時間前。

僕と父は二人で酒を飲んでいた。

母と飲むと荒れて結局は殴られるし。
姉と飲むと荒れて結局は殴られるし。

つまり。

結局はこうして父と僕がそろつのは何ら不思議なことではなく当然のことなのです。

自衛本能の結果なだけなのです。

生存本能なのです。ああ。人間ってすばらしい。

お互いのお猪口にお酒をついでくいと一気飲み。

はぁーと息を漏らして互いに微笑む。そう、この平和な一時に乾杯。姉は自分の部屋で僕の漫画を読みふけているし母は風呂に入っている。

限られた時間ではあるが今のこの時間が平温である事は確かだ。

さつき時間稼ぎのために姉にはアニメのDVD、母には美容セットも渡してきた。

これですばらくは時間が延びるはずだ。

そんな事を考えていると父が口を開いた。

「お前は体がたくましくなったなあ。」

父さん、母が相手してくれないからって僕をそんな目で見ないでください。

下から上に視線を動かすんじゃない！

いや、嫌よあたし！興味のある男以外とは体は……！

「何を考えているか予想できるけど……」

予想できるならそんな目で見ないでくれ。いや、僕の考えが間違っているのか。

「急になんだよ……あ、それより俺聞きたいことがあるんだよ。」

興味範囲で買ったビリーブランクス。

まったく予想外の結末であるが無駄にのめり込んでしまった。その結果、僕に与えられたプレゼントはスリムで美しい腰のラインでは無く、その辺の女子より大きい胸囲と無駄な上腕二頭筋だ。そんな事は置いておいて、本題を続ける。

「なあ。母さんと父さん。どうして結婚したんだ？」

「……母さんが聞いていたらお前。死んでるな。」

僕は自分と父の分のお猪口に新しい酒を注ぎながら言葉を続ける。

「普通なら出会わない二人じゃないか。銀行員と元レディース。」

唐突な展開に目を白黒させていると父は唐突に笑い出した。僕も何がおかしいのかわからない。

むしろ色々な意味でおかしくなったのではないかと本気で父を心配する息子がここに一人。そして父は微笑みながら僕にこういうのであった。

「父さんはな。決められた事しかできなかった。」

その言葉から始まった父と母の壮大なストーリー。僕は息を呑んで固唾を見守った。

はずだったんだけど。姉の部屋から僕を呼ぶ声がして話はさえぎられた。

父は言って来い、と手のひらをヒラヒラとさせ新しい酒を取りに冷蔵庫へと向かっていった。

タイミングの悪い呼び出しに軽くイラつきを覚えながら姉の部屋に入る僕。

ドアノブに手を掛けて姉の部屋に入る。

「どうしたの？何か用？」

姉は真剣な顔をしながら近くに寄れという。

しまった。さっきの発言を聞かれたか？ゆすられる恐怖を胸に近づく僕。

そして姉の口から言葉が飛び出した。

「このおぼけがあああああー！」

とたんにベッドのから飛び上がった姉。さながらマトリックスのようだ。

そのポーズに意味はあるのか。そう思った瞬間手刀が肩にめり込ん

だ。

「グハアツツ!!」

短い悲鳴を上げて倒れこむ僕。その上にまたがる姉上。手にはさっき貸したDVDが握られていた。ソレを誇示するかのように高らかに上に上げて……。振り下ろす。

鈍い音が部屋に響く。

「ギャツ!」

ウメスカズオの漫画じゃありません。今ここで起こっている惨劇です。

姉は興奮した様子で暴言を吐く。

「り、理由を!お願い理由、がふあっ!」

姉の膝蹴りが股間にダイナマイト。アンドジャストミート。

姉は息も絶え絶えにこう言った。

中身が違つと。中身を確かめると確かに違つ。この間、間違えて借りた近親相姦のDVDだ。

だつてほら。よくやるでしょ皆さん。あいたケースに別の中身入れちゃうこと。

ねえ。よくあることじゃない。

僕だって普通のAVがよかったんだ。

ただこれは純粹に店員のミスなんだよ。

ただ。中身がよくなかった。

「はい。題名を大きな声で読みなさい。」

「そ、それだけはお勘弁を！姉貴、金は払う！いくらだ！いくら欲しい！」

そして放たれる右膝ダイナマイト。めり込む腹にジャストミート。
Yeah。チエケ。

姉は窓を開けてこちらを振り返る。その顔はさながら般若の如し。

「次は玄関のドアも開けようかあ？」

「頼む！わざとじゃないんだ！許してください！許してください！」

繰り返される暴言と懺悔。

父はドアの外から顔を半分だけ出してこちらを覗き見ている。

来るな。

目で合図すると父はすばやくリビングへ戻っていった。

父よ。ちよつとはこう・・・ね。助ける仕草というか父の威厳というか。

そんなの関係ねえーとばかりに姉は言葉を続けた。

言霊ってありますね確実に。ここに。

「題名を。読め。大声で。」

ああ。さようなら僕の近隣の皆様との信頼関係。そして平穏な日々よ。

こんにちは。変態と呼ばれる日々よ。迎えるがいい。

最強の変態の誕生だ！変態王の誕生だ！そしてその王は誕生の産声を上げる。

高らかに。

「姉とハイハイハイハイハイハイハイハイ！！！！」

この大声を聞きつけた母が僕を家から追い出すのにかかった時間はあつという間のことだった。一人で酒を楽しんでいた父もお守りとして巻き沿いに。そして今に至る。

こんなはずじゃなかった。父と母の感動のストーリーが幕を開けるはずだったのに。全米が泣いた！みたいな感じだったのに。

今。色んな意味で全米が泣いたストーリーが出来上がりつつある。僕と父の凍死という結末で。

ふふ、星が……まぶしい夜だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600e/>

僕の家族を紹介します。

2010年10月17日06時44分発行